

市原市徒士橋遺跡

1 9 9 0

小 川 商 事 株 式 会 社

財団法人 市原市文化財センター

本文目次

序 文

例 言

財団法人市原市文化財センター組織表(平成元年度)

1	序 説	1
	I. 調査に至る経緯と経過	1
	II. 遺跡の位置と環境	1
2	検出された遺構と遺物	6
	I. 概 要	6
	II. 遺構と遺物	6
	1号遺構	6
	2号遺構	8
	3号遺構	10
	4号遺構	12
	5号遺構	15
	6号遺構	15
	7号遺構	15
	8号遺構	15
	9号遺構	15
	10号遺構	17
	遺構外出土遺物	17
3	まとめ	18

挿 図 目 次

第1図	喜多徒士橋遺跡と周辺遺跡	3
第2図	喜多徒士橋遺跡周辺地形図	4
第3図	喜多徒士橋遺跡遺構配置図	5
第4図	1号遺構及び出土遺物実測図	7
第5図	2号遺構及び出土遺物実測図	9
第6図	3号遺構実測図	10
第7図	3号遺構出土遺物実測図	11
第8図	4号遺構実測図	12
第9図	5・6・7号遺構実測図	13、14
第10図	8・9・10号遺構実測図及び遺構外出土遺物実測図	16

表 目 次

第1表	周辺の主な遺跡	3
第2表	喜多徒土橋遺跡新旧番号一覧表	5
第3表	1号遺構出土土器観察表	6
第4表	2号遺構出土土器観察表	8
第5表	3号遺構出土土器観察表	11

図版目次

図版1	喜多徒土橋遺跡全景(北側より)
	〃 (南側より)
図版2	1号遺構全景 1号遺構刀子出土状況
	2号遺構全景 2号遺構刀子出土状況
	3号遺構全景 同カマド遺物出土状況1～3
図版3	4号遺構全景 P1土層断面
	P3土層断面 P5土層断面
	7号遺構(2号遺構付近)紡錘車出土状況 8号遺構全景
	9号遺構全景 10号遺構全景
図版4	1号遺構出土遺物 1～8
	2号遺構出土遺物 1～12
図版5	3号遺構出土遺物 1～7
	遺構外出土遺物 1～25

序 文

房総半島東京湾岸の中央に位置する市原市は、西広貝塚や二子塚古墳に代表される様に、県下でも有数の貝塚や大型前方後円墳の集中する地域でもあり、奈良時代においては、上総国の中心地として国府・国分僧寺・尼寺などがこの地に置かれました。また一昨年話題を集めた「王賜」銘鉄剣を検出した稲荷台古墳も存在するなど、まさに埋蔵文化財の豊庫として周知されている所でもあります。

これらの埋蔵文化財を保存、活用し後世に継承していくことは、我々市民に課せられた課題であり、切望するところでもあります。一方では首都圏に位置し、東京のベッドタウン、あるいはゴルフ場に代表されるレジャーの場として、昭和30年代後半における京葉工業地帯の造成を契機として、地域開発が急速に進み、これらの地域開発と埋蔵文化財保護との調和の必要性が高まっております。

今回ここに報告する「徒士橋遺跡」は、喜多地区宅地造成工事に先立ち、造成と埋蔵文化財保護との調整に基づき、関係諸機関の御協力をいただいて発掘調査を実施いたしました遺跡であります。

本報告書は、この調査成果をまとめたものであり、学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のために広く市民の皆様にも活用していただけるならば幸いです。本書の刊行にあたり、御指導・御協力をいただいた千葉県教育庁文化課、ならびに小川商事株式会社の方々に厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

市原市教育委員会

教育長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市喜多徒士橋における宅地造成事業に先行して実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書に所収する内容は、千葉縣市原市喜多字徒士橋771番地1他に所在する徒士橋遺跡についての発掘調査報告書である。
3. 発掘調査・整理作業は以下のとおり行った。
発掘調査 平成元年12月7日～12月27日
整理作業 平成2年1月4日～1月31日
4. 本書の原稿執筆は、木對和紀が行った。
5. 本書に使用した方位は、座標北である。

財団法人市原市文化財センター組織表（平成元年度）

役 員		職 員	
理 事 長	星 野 一 郎(教育委員会教育長)	庶 務 課	課 長 田 丸 萬 富
副理事長	大 野 義 規(教育委員会社会教育部長)		主 事 大 鐘 光 江
常務理事	須 田 昇 三(専任)		事務員(嘱託) 秋 田 晴 美
理 事	滝 口 宏(早稲田大学名誉教授)		事務員(嘱託) 石 渡 あ ゆ み
理 事	寺 村 光 晴(和洋女子大学教授)	調 査 課	課 長 矢 戸 三 男
理 事	海 上 信 久(姉崎神社宮司)		係 長 宮 本 敬 一
理 事	根 本 正 夫(市企画部長)		主任調査研究員 田 中 清 美
理 事	宮 崎 芳 雄(市総務部長)		主任調査研究員 浅 利 幸 一
理 事	地 引 希 壹(市都市部長)		調 査 研 究 員 大 村 直
理 事	安 藤 隆 一(市財務部財政課長)		調 査 研 究 員 近 藤 敏
監 事	佐 久 間 章(市会計課長)		調 査 研 究 員 高 橋 康 男
監 事	小 宮 仁(教育委員会総務課長)		調 査 研 究 員 木 對 和 紀
			調 査 研 究 員 忍 澤 成 視
			調 査 研 究 員 田 中 茂 良
			調査研究員(嘱託) 田 中 新 史
			調査研究員(嘱託) 半 田 堅 三
			事 務 員(嘱託) 高 浦 貞 子

1 序 説

I. 調査に至る経緯と経過

喜多地区宅地造成工事に伴い、小川商事株式会社代表取締役小川道郎は、事業地域内における「埋蔵文化財の有無及びその取扱い」についての照会を市原市教育委員会文化課に提出し、これを受けた文化課との協議の結果、次の様な方針が決定された。

1. 国費・県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり遺構確認調査を実施する。
2. 遺構確認調査の結果に基づき協議を行ない、本調査の範囲を決定し記録保存とする。

II. 遺跡の位置と環境

喜多徒士橋遺跡は第1図10の番号を付した地点に存在している。立地は標高およそ60m、東に村田川に合流する喜多川が形成する台地上に位置している。

この遺跡の所在する台地上の調査は今回が初めてであり、周辺遺跡との関係はまったくの未知数である。市原市教育委員会が編集した千葉県市原市埋蔵文化財調査地図―北部編―によれば、遺跡東側は縄文時代を中心とする多竜台遺跡が広範囲に亘って展開しているものの、今回の調査によって得られた数片の縄文時代後期の資料では、直接結びつけることはできない。

ここではこれまで調査が実施された遺跡を中心として、徒士橋遺跡周辺の様相を捉えることにしたい。

村田川の北岸に位置する千原台遺跡群は、大規模な開発に伴う広範囲にわたる発掘調査が実施されており、草刈遺跡やこれに隣接する草刈六之台遺跡・川焼台遺跡などでは弥生時代～奈良・平安時代まで及ぶ多数の遺構が検出され、いわば拠点集落跡の様相を示している。これに対する南岸は極めて断片的な調査が多く全貌は不明ながら、神崎川に面する西側の舌状台地先端部には西山遺跡が存在している。ここでは古墳時代前期～奈良時代における25軒の住居跡の他に掘立柱建物跡と四脚門を伴う柵列塀が検出されており、注目される遺跡である。西山遺跡を西側に南下していくと、さらに一段高く西側に突出する舌状台地が存在し、先端部に居鞍古墳群が存在する。群中4基のうち前期の方墳と中期以降に下る円墳が調査された。この古墳群の南眼下に天王台遺跡が存在し、弥生時代終末～古墳時代前期にかけての住居跡2軒と木棺墓1基が検出されている。さらに南には中潤ヶ広1号墳が存在し、古墳時代後期に比定される円墳が調査されている。この天王台遺跡と中潤ヶ広1号墳を結ぶ台地上には、肉眼においても墳丘の存在が顕著に観察される30数基からなる天王台古墳群が存在している。

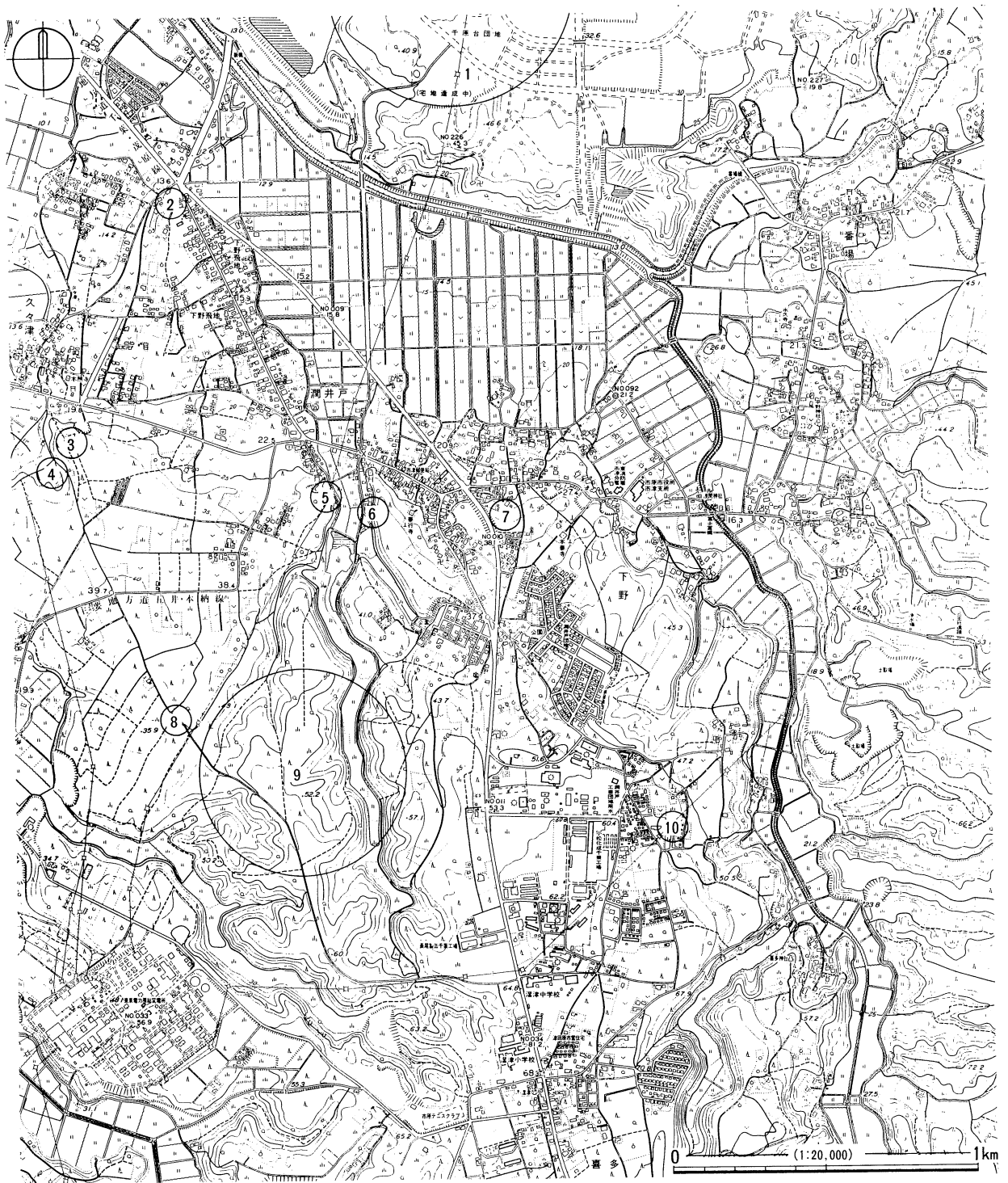
さて西山遺跡の東側を南下していくと、前方後円墳をはじめとする古墳の存在が顕著に認められる。まず全長60m杉山古墳、続いて33mの山王後古墳が存在し、支谷を挟んで対岸には全長45mの小谷1号墳が存在している。山王後古墳は6世紀代の築造と考えられており、直刀2本と鉄鏃1点が検出されている。小谷1号墳は6世紀後葉前後に比定される60個体以上の円筒埴輪列が墳丘中段面において検出されている。また小谷1号墳の谷を挟んだ東側には上横峰遺跡が存在する。ここでは6基の古墳が検出されており、周辺には現況においてもマウンドを保持する古墳が顕著に認められる。

山王後古墳及び小谷1号墳間の支谷を南下すると下鈴野遺跡が存在する。ここでは弥生時代終末～古

墳時代前期にかけての住居跡34軒と古墳時代中期前後に比定される円墳5基が検出され、その後一旦墳墓の造営活動はおさまるものの、奈良時代以降には再び墳墓群が造営され始めている。現在の所、徒士橋遺跡周辺における広範囲な発掘調査例はこの下鈴野遺跡のみであり、各遺跡における相互関係は不明と言わざるを得ない。しかしながら、調査が実施された各遺跡においては、菊間国造の奥津城と考えられる菊間古墳群や周辺の遺跡及び千原台遺跡群と対比してみた場合、あまりにも貧弱であり、少なくとも古墳時代前期の段階においては一つの文化の従属的存在であったらうということが垣間見られるのである。

第1表 遺跡関係文献等

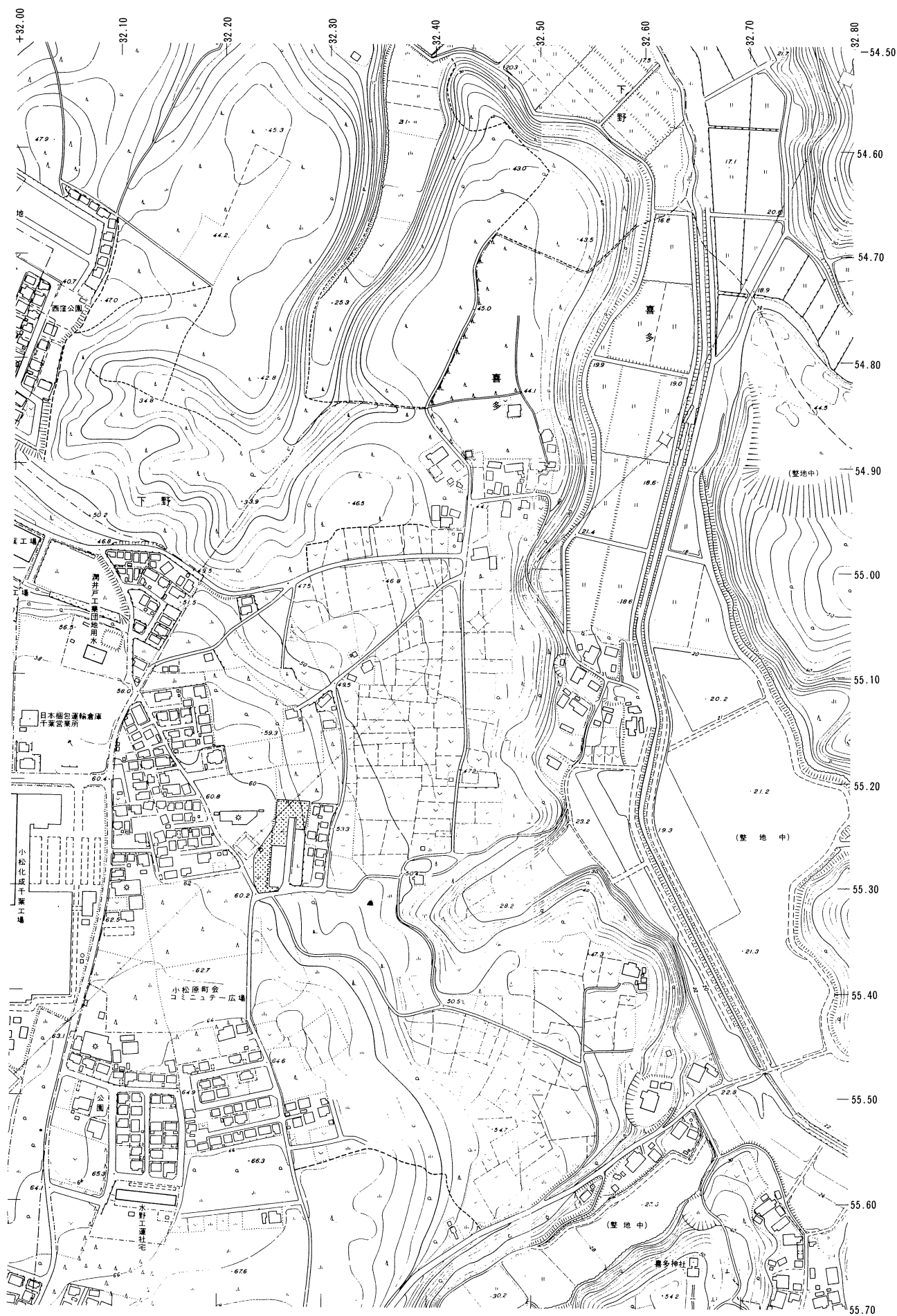
1. 高橋康男 『草刈遺跡』（財）市原市文化財センター 1985
小久貫隆史他 「草刈遺跡A区」『千原台ニュータウンII』 1983
高田 博他 「草刈遺跡B区」『千原台ニュータウンIII』 1986他
2. 鈴木英啓 『潤井戸西山遺跡』（財）市原市文化財センター 1986
3. 昭和63年度（財）市原市文化財センター調査
4. 木對和紀 「天王台遺跡」『中潤ヶ広・天王台遺跡』（財）市原市文化財センター 1988
5. 1975年東京電力の鉄塔建設時に市原市教育委員会が調査 直刀2点と鉄鏃1点を検出
6. 高橋康男 『第4回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』 1989
7. 木對和紀 「潤井戸上横峰遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会 1990
8. 木對和紀 「中潤ヶ広遺跡」『中潤ヶ広・天王台遺跡』（財）市原市文化財センター 1988
9. 大村 直 『下鈴野遺跡』（財）市原市文化財センター 1987
10. 木對和紀 「喜多徒士橋遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会 1990



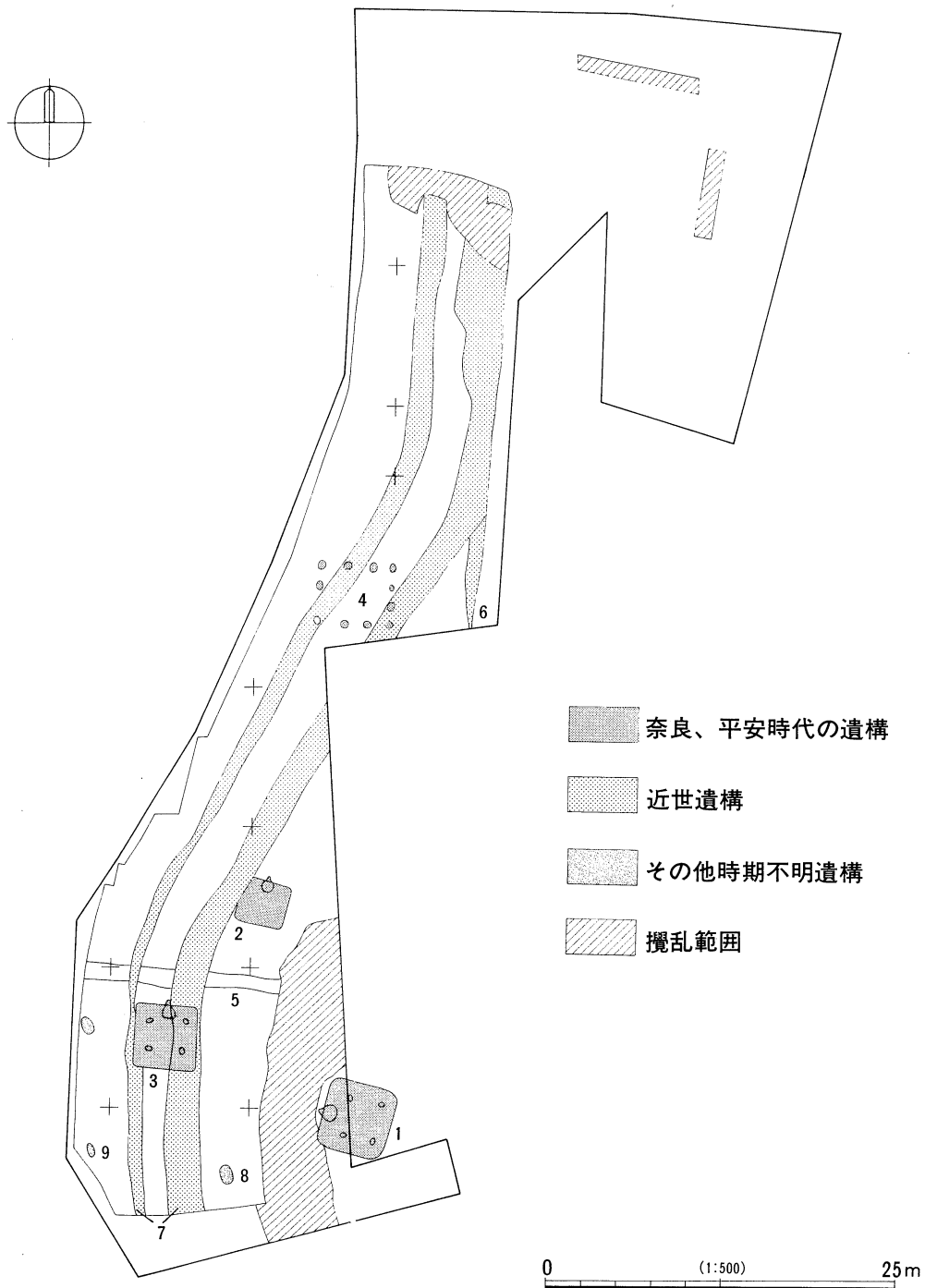
第1表 周辺の主な遺跡

No.	遺跡名	性格	No.	遺跡名	性格
1	千原台遺跡群	集落跡、墳墓等	6	潤井戸小谷1号墳	全長45m前方後円
2	潤井戸西山	集落跡	7	〃 上横峰	古墳、集落跡
3	〃 居鞍	古墳群	8	中潤ヶ広	古墳
4	〃 天王台	集落跡	9	下鈴野	古墳、集落跡
5	〃 山王後古墳	全長33m前方後円	10	喜多徒士橋	集落跡

第1図 喜多徒士橋遺跡と周辺遺跡



第2図 喜多徒土橋遺跡周辺地形図 (1:5,000)



第3図 喜多徒士橋遺跡遺構配置図

第2表 喜多徒士橋遺跡新旧番号一覧表

報告書遺構番号	本調査時遺構番号	過 程	確認調査時遺構番号
1	1		1
2	2		2
3	3		3
4	9	新発見	ナシ
5			4
6	8	新発見— 欠番 —	8
7	7	1 対の遺構と判明	6・7
8	5		5
9	10	新発見	ナシ
10	11	新発見	ナシ

2 検出された遺構と遺物

I. 概 要

喜多徒土橋遺跡における今回の発掘調査の対象範囲は、第2図に示したスクリーン上の1,865m²の範囲である。遺跡北、西側は、ソフトローム層以下に達する削平を受けており遺跡の遺存状況は必ずしも良好と言えないが、削平をまぬがれた東側を中心とする区域内には奈良・平安時代の住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、近世の溝（道路状遺構含む）4条、時期不明土壌3基を検出している。

II. 遺構と遺物

1号遺構（第4図・図版2・4）

確認調査時に一部を調査した遺構である。覆土の大半は削平を受け、土層断面を作成したA～A'以東は、周構及び床面上に10～5cm程度の覆土がかろうじて残存（一部は床面以下に達する削平を受ける）しており、遺存状況は極めて不良ながら全体の規模・形状はなんとか観察することができた。

平面形は一辺およそ5.4mの方形を呈しており、主軸方位はN-101°-Eを示す。壁際の床面上には焼土・炭化物が散在しており、床面はカマド及び4本の支柱穴内側が硬く引締まっている。支柱穴はいずれも明瞭なる柱据置き痕跡を有し、深さは床面より70～90cmを測り掘込も深くしっかりしている。

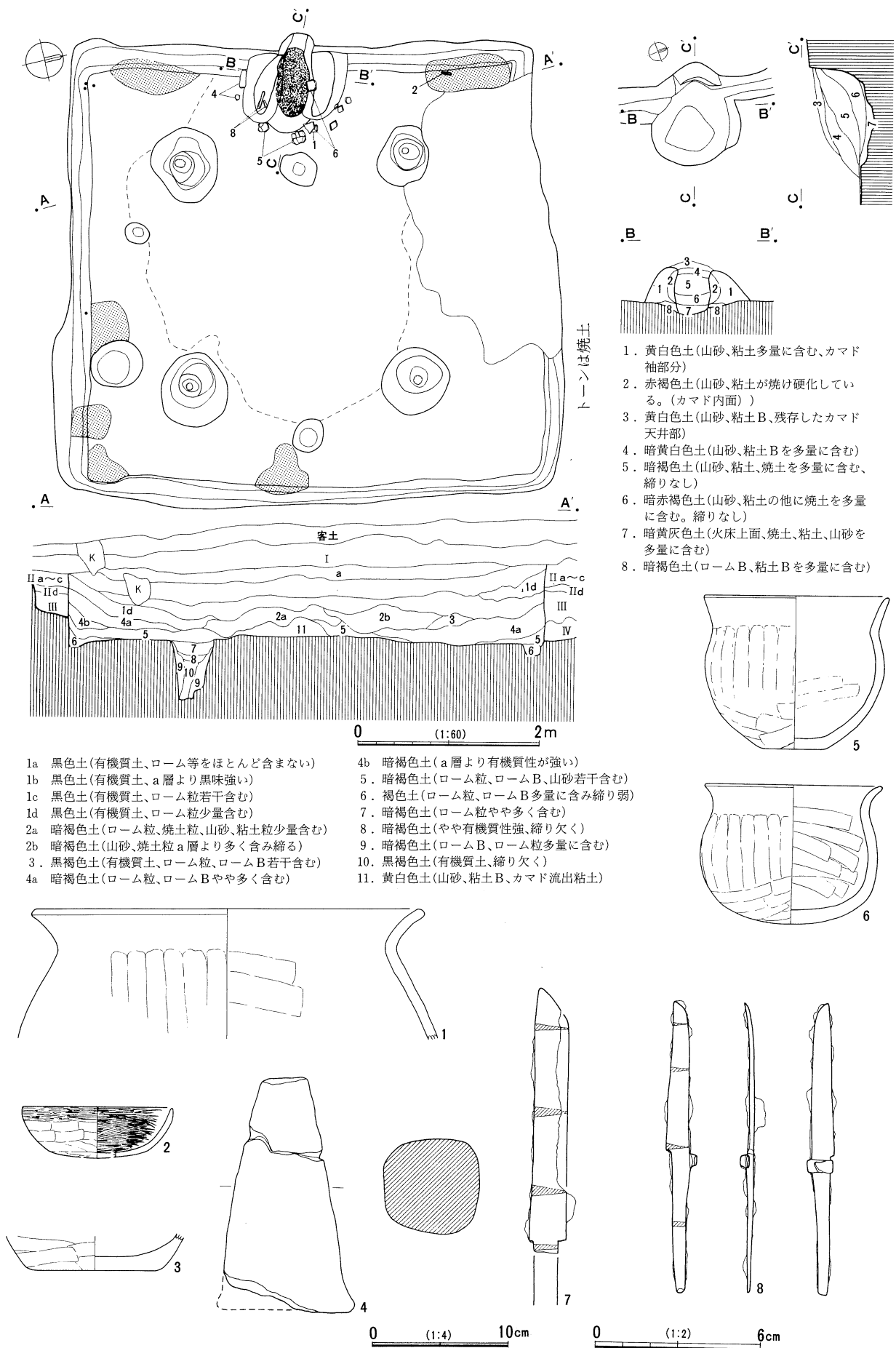
この他床面には4本のPitが検出され、東壁に近いものは入口施設に伴うものと推定され、径36cm、深さ40cm前後を測る。またカマド前面には灰、炭化物、焼土粒がつまったPitが検出され、径42cm、深さは25cm前後を測り、カマドより産出される灰等を一次的に収納するPitかと考えられた。この他2つのPitは径10cm・60cm、深さは15cm・20cmをそれぞれ測るが、何に使用されていたかはよく解らない。

カマドは西壁に接して構築されており、すこぶる良質の粘土が使用されている。このカマド周辺のみ削平をまぬがれており、壁及び掘り込み面も明瞭に検出された。基本土層2a層以下を掘り込んでおり、覆土は自然堆積の状況を示し、壁は急激に立ちあがっている。

遺物は削平をまぬがれたカマド周辺に分布しており、1～6の土師器及び支脚がカマド内及び袖周

第3表 1号遺構出土土器観察表

図番	器種 遺存度	法量(推定)cm			焼成	色 調	胎 土	整 形・調 整 等	備 考
		口径	底径	器高					
1	甕 口縁 $\frac{1}{6}$	(28.0)	—	—	不良	淡褐色	微砂粒多	外・ヘラケズリ・内・ヘラナデ	もろい
2	坏 $\frac{1}{4}$	(11.0)	—	(3.7)	良好	外淡褐色 内黒色(黒色処理)	密	外・口辺ミガキ・体部ヘラケズリ 内・ヘラミガキ・(光沢が表われる程のミガキ)丁寧	
3	甕 底部 $\frac{1}{2}$	—	9.0	—	良好	茶褐色	密	外・ヘラケズリ	
4	支 脚	—	—	—	不良	茶褐色	砂っぽい (ザラザラ)	二次加熱を受け、もろい	
5	小甕 $\frac{3}{8}$ 弱	13.5	4.6	11.2	良	淡褐色	密	二次加熱を受け、内外面共若干剝離している	
6	小 $\frac{1}{2}$ 強 甕 残	13.0	3.0	10.2	良	橙褐色	微砂粒多含	外・口辺ナデ 胴部ヘラケズリ 内・口辺ナデ 胴部ヘラナデ	二次加熱を受ける



第4図 1号遺構及び出土遺物実測図

辺の床面密着状況で検出されている。7は茎と刃の大部分を欠損し壁際焼土上面から検出された刀子である。全長9.7cm、身部長9.2cm、身幅1.3cm、棟幅0.4cm、茎は0.5cm程残存する。関は両側に切り込まれ、縁金具、木質等は認められず、重量は8.8gを量る。8はカマド袖上から検出された刀子である。全長10.5cm、身部長5.3cm、身幅0.6～0.8cm、棟幅0.5cmを測る。関は片側に切り込まれ、縁金具が片側のみに遺存する。茎は関部より尻に向けて幅を減じる。木質は認められない。重量は5.7gを量る。

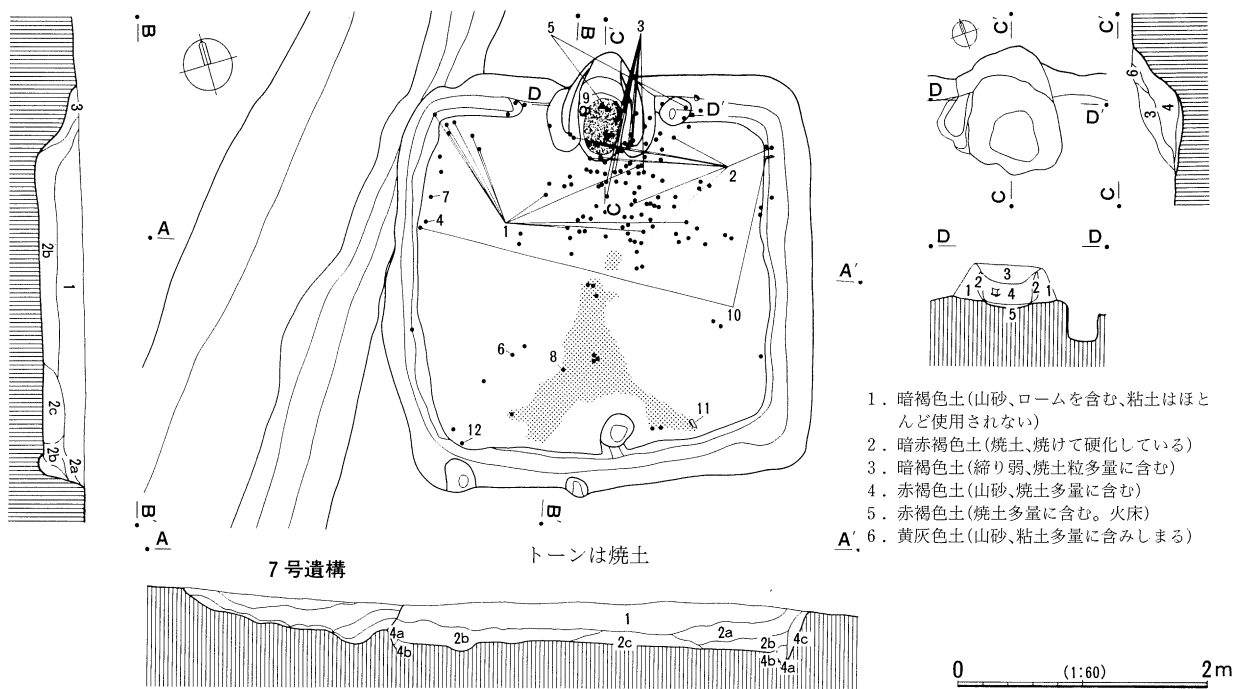
2号遺構（第5図・図版2・4）

西壁の一部を7号遺構に切られて存在する。平面形は一辺およそ3.1mの方形を呈しており、主軸方位はN-14°-Eを示す。南壁～中央にかけての床面はよく引き締まっており、直上に焼土を散布する。Pitは南壁際に3本及びカマド右脇に1本の計4本認められるが、南壁際中央部及びカマド脇に位置するもの以外は、掘り込みはしっかりしていない。それぞれ径30cm、深さ30cm前後を測り、南壁際のPitは入口施設に伴うものと考えられる。カマドは北壁に接して構築されているが、左袖部は住居構築の際に意識的に掘り残したローム土の上に、黒色有機質土に山砂・粘土を少量混入した粗雑なものであり、右袖部はローム掘り残しが認められないものの同様の素材を用いている。

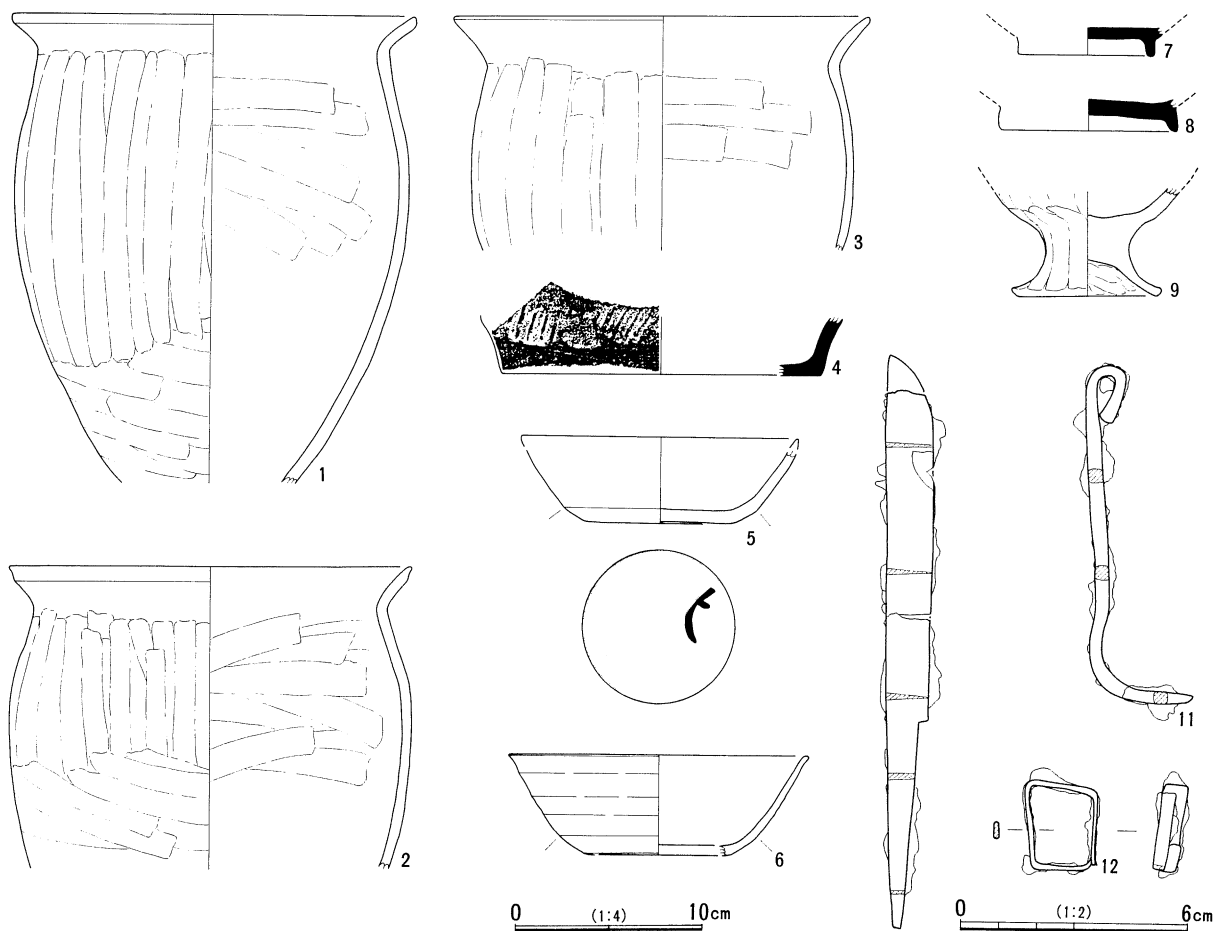
遺物はカマド内及び周辺に集中的に散布するものの、鉄器は壁際に検出する傾向が認められた。5はカマド内及びカマド脇Pitより検出された坏である。Pitより検出された一片のみ灰褐色を呈し、墨書が認められたが、トーンで示した他片は褐色を呈し墨書の存在が認められなかった。「丈」及び「大」の文字が記されたものと考えられる。10は東西壁際よりそれぞれ検出され、接合関係を有する刀子である。鋒は欠損するものの全長5.1cm、身部長8.7cmを呈するものと考えられる。身幅1.2cm、棟幅0.2cmを測り、関は片側に切り込まれる。茎は尻に向かって幅を減じる。木質は認められず、重量は11.5gを量る。11は南壁際及び4号掘立柱建物跡付近の7号道路遺構左側側溝部より検出した一片と接合関係を有した用途不明鉄製品である。形状は釣針あるいはフック状を呈しているが、何に使用されたかはよく解らない。全長は9.0cm重量は10.9gを量る。12は幅4mm、厚さ2mmの鉄板が螺旋状にまわる用途不明鉄製品である。重量は2.7gを量り、南西コーナー部壁際床直上からの検出である。

第4表 2号遺構出土土器観察表

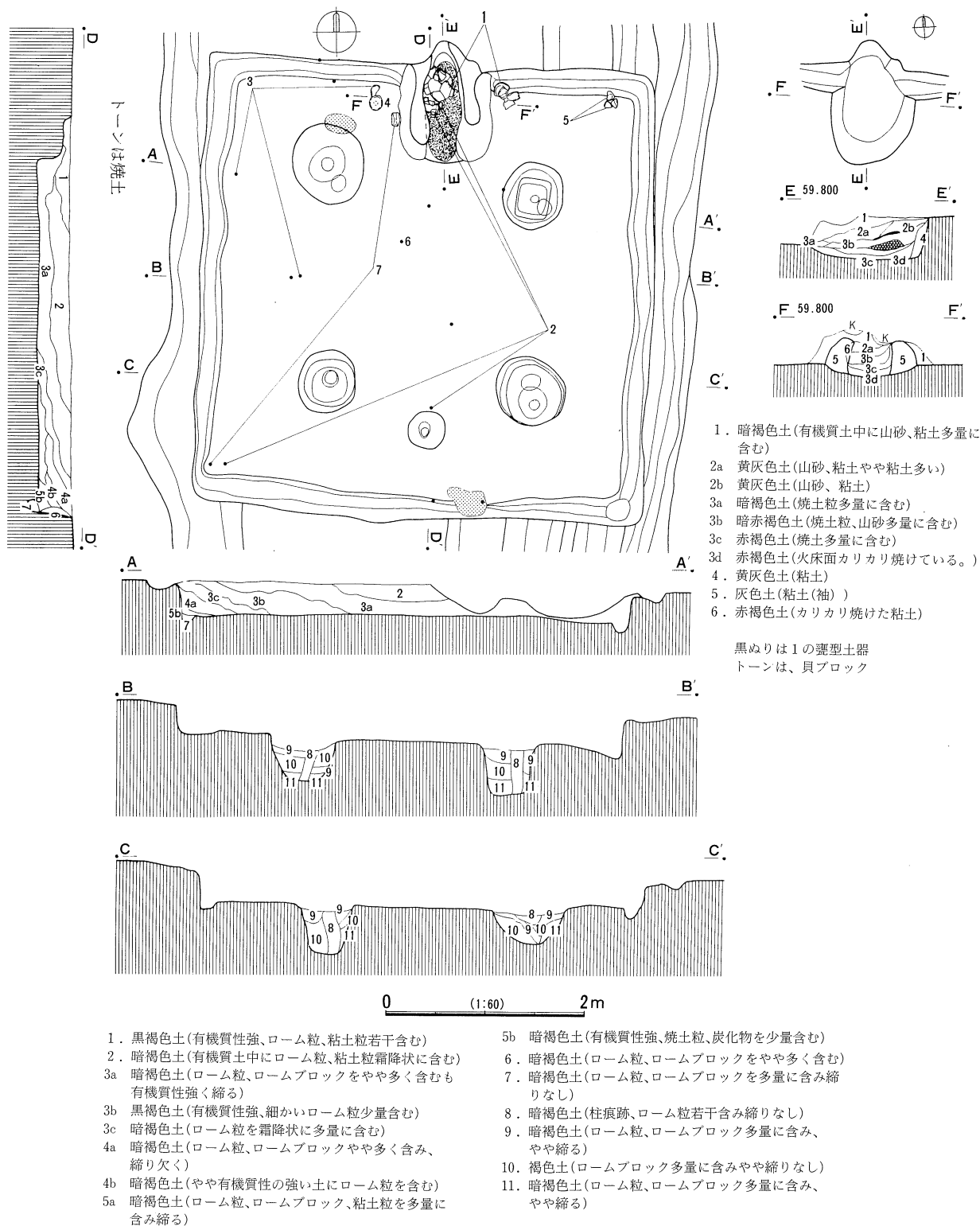
図番	器種 遺存度	法量(推定)cm			焼成	色調	胎土	整形・調整等	備考
		口径	底径	器高					
1	甕 口部 胴部 1/2	(21.5)	—	—	良好	暗褐色	微砂粒多含	外・口辺ナデ全胴部縦ヘラケズリ、胴部下半斜め方向のヘヘケズリ。内・口辺ナデ、胴部ヘラナデ(器面の剝離やや激しく不明瞭)	
2	甕 口部 胴部 1/2	21.5	—	—	良好	淡褐色	密	外・縦ヘラケズリ、胴部下半斜めヘラケズリ 内・ヘラナデ	
3	甕 口部 胴部 1/2	22.2	—	—	良好	淡茶褐色	密	外・口辺ナデ、ヘラケズリ、内ヘラナデ	器厚非常に薄い
4	底 甕部 1/6	—	—	—	良好	茶褐色	密	外・タタキ	須恵器
5	坏 1/3	—	8.2	—	良	褐～灰色	密	ロクロ、回転糸切り 内外面、剝離激しい	底部に「大」?の墨書あり
6	坏 1/3	(16.0)	(8.0)	(5.3)	良好	茶褐色	密	ロクロ、内・ミガキ丁寧、体部下位回転ヘラケズリ 底部の切り離しは不明	底部全欠く
7	高台付 坏底部 1/2	—	7.3	—	良好	青灰色	白色微砂粒含	ロクロ	須恵器(硬緻)
8	高台付 坏底部 1/4	—	(9.5)	—	良好	灰色	密	ロクロ	須恵器
9	台付 甕 底部のみ	—	7.4	—	良好	燈褐色	微砂粒多含	外・ケズリ・内・ナデ	(二次加熱)



- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 黒色土(有機質土中にローム粒霜降状に若干含む。最も黒味強い) | 3. 黒褐色土(有機質土中にローム粒、焼土粒多く含む、山砂が少量散る) |
| 2a 黒褐色土(有機質土中にローム粒少量含む) | 4a 暗褐色土(ローム粒やや多く含む締めなし) |
| 2b 有機質土中にローム粒若干含む | 4b 暗褐色土(ローム粒ロームBやや多く含む締めなし) |
| 2c 黒褐色土(有機質土中にローム粒、焼土粒多く含む) | 4c 褐色土(ローム粒多量に含む) |



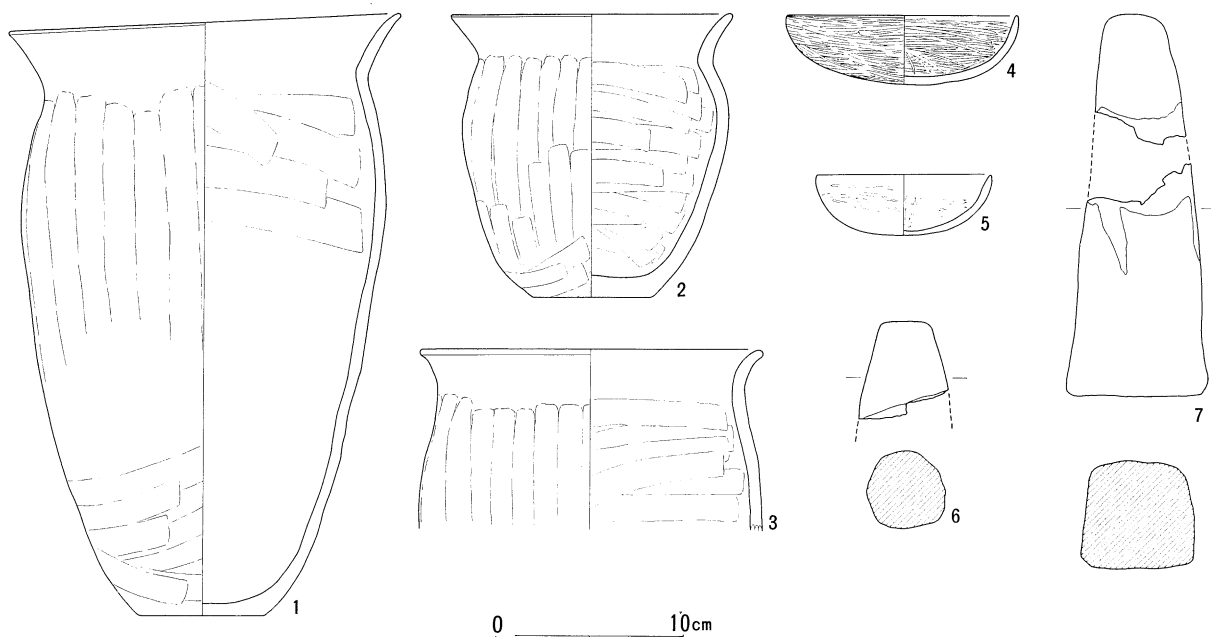
第5図 2号遺構及び出土遺物実測図



第6図 3号遺構実測図

3号遺構 (第6図・図版2・5)

7号遺構に覆土上面を削平されているものの、掘り込みはしっかりしており壁立ち上りも明瞭に検出された。平面形は一辺およそ4.5mの方形を呈しており、主軸方位はN-4°-Eを示す。Pitは5本検出され、南壁近くのカマド正面に位置するものは入口施設に伴うものと考えられ、径40cm、深さは



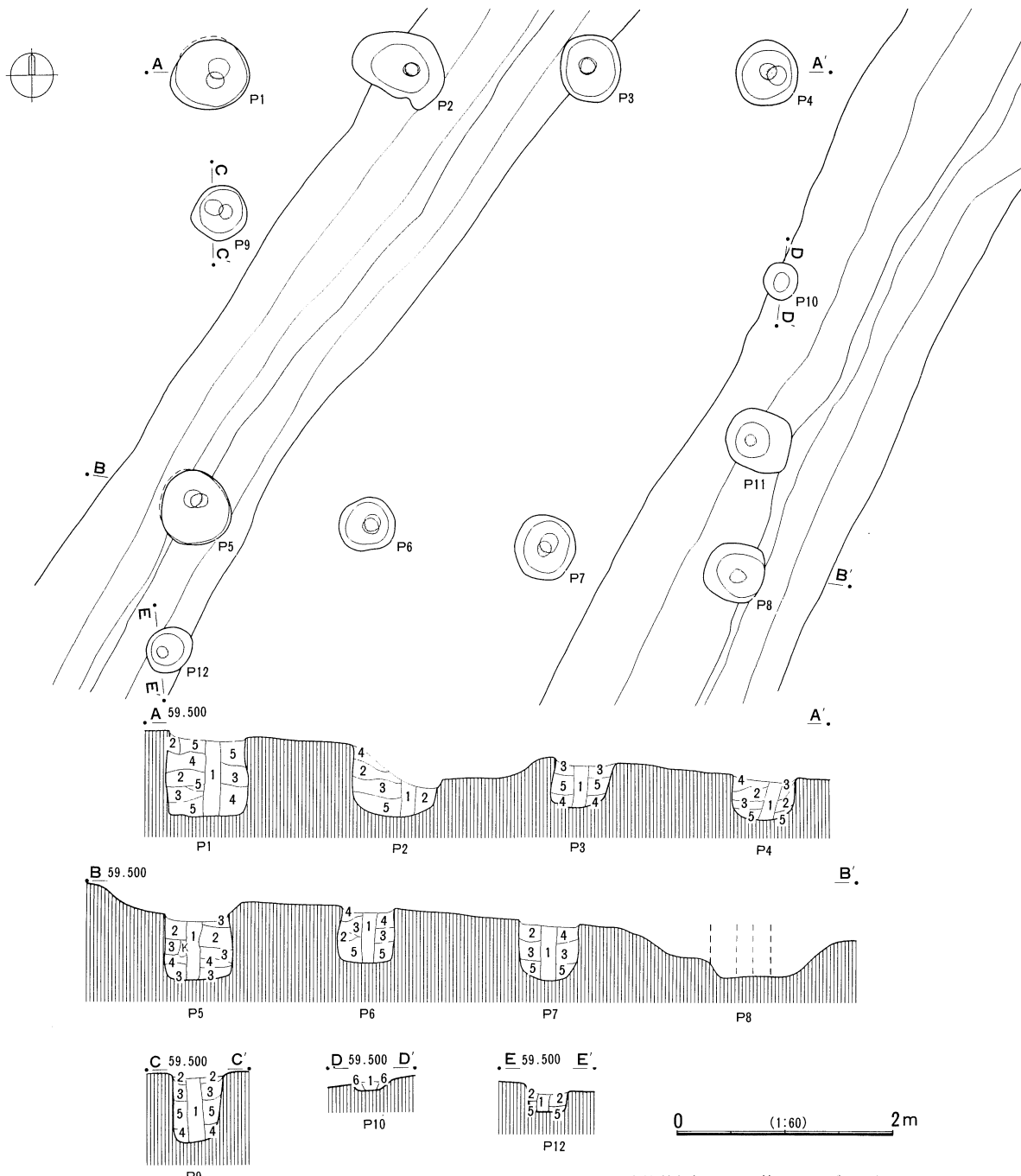
第7図 3号遺構出土遺物実測図

第5表 3号遺構出土土器観察表

図番	器種 遺存度	法量(推定)cm			焼成	色 調	胎 土	整 形・調 整 等	備 考
		口径	底径	器高					
1	甕 3/4 残	21.0	6.6	32.0	良好	淡茶褐色	密	外・ヘラケズリ、二次加熱を受けて剥離している箇所あり 内・口辺横ナデ、胴部ヘラナデ	最大径は口縁
2	小型甕 ほぼ完	15.0	6.3	15.0	良好	淡褐色	密	外・口辺ナデ、胴部ケズリ、内・ナデ	
3	甕口 胴部1/2弱	(18.2)	—	—	良好	淡茶褐色	密	外・口辺ナデ、胴部ヘラケズリ、内・ナデ	
4	坏 完	12.4	—	3.2	良好	茶褐色	密	外・ケズリ後ミガキ、内・ミガキ	丁寧に作られる
5	坏 2/3 残	9.4	—	3.2	良好	淡茶褐色	密	外・ケズリ後ミガキ、内・ナデ後ミガキ 器面の剥離やや激しく、ミガキは明瞭に残存しない	
6	支先 脚部	—	—	—	不良	茶褐色	微砂粒多		断面は円形
7	支 胴中位欠	—	6.9	(20.3)	不良	茶褐色	微砂粒自然石(2~3cm大)多		断面は方形

25cmを測る。他の4本は主柱穴であり、それぞれ、径60~70cm、深さは50~60cm前後を測り掘り込みも深くしっかりしている。いずれも明瞭なる柱痕跡及び柱据置痕跡を有するが、南西コーナー付近以外のものは動いている。床面は北東コーナー部を除けば全体的によく引き締まっている。カマドは北壁に接して構築されており、すこぶる良質の粘土を使い、天井部分が残存していた。(7号遺構の影響を受け、若干落下しているものと考えられる)

遺物はカマド内及び周辺の床面に集中するが全体量は少ない。1はカマド据置のままと考えられる甕であり、口縁部はカマド右袖の床面より、胴部はカマド内で大きく2つに割れた形で検出されている。1ブロックは天井部上掛け口付近で、2ブロックは天井部下掛け口付近より検出されており、さらにこの2ブロック破片の下には間層を挟んでハマグリ、アサリ、シオフキ、マテガイの貝ブロックが焼けた状態で灰と伴に検出されており、おそらく1の甕型土器の中に入っていた貝が何かの拍子に甕が割れてしまい、口縁部はカマド外に、胴部は二つに割れて掛け口の上下に、貝は火床に落下して

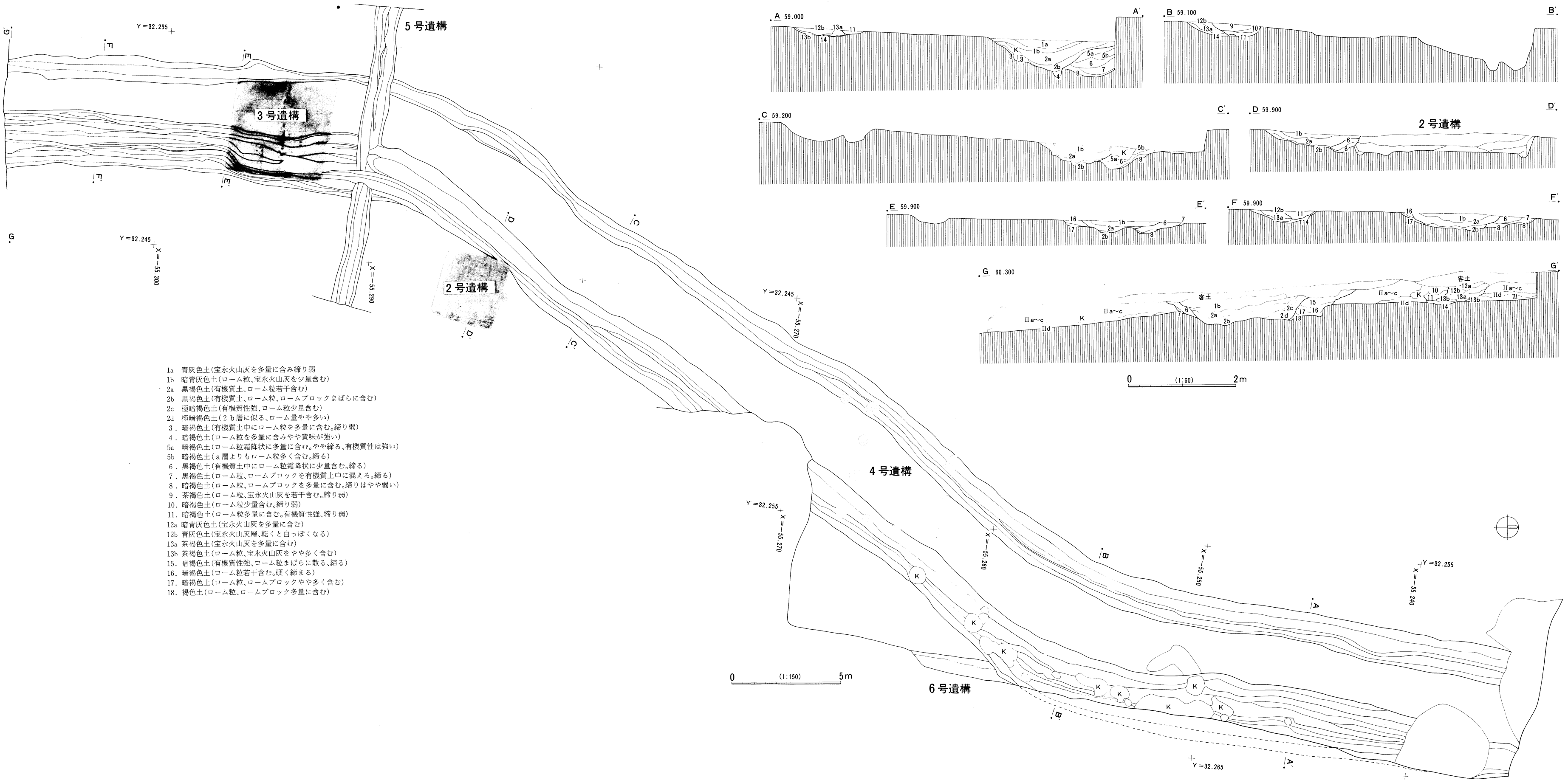


第8図 4号遺構実測図

しまったものと考えられる。また検出された貝量は少なく、みそ汁に換算し1人1杯と換算すれば2人分相当の量である。

4号遺構 (第8図・図版3)

桁行3間(5.1m)×梁行3間(4.6m)の東西に長い掘立柱建物跡であり、主軸方位はN-1°-Eを



第9図 5・6・7号遺構実測図

示す。P 2・3・5・10・12・は7号遺構によって覆土の一部を、P 8・12はそれぞれすべてを削平されているものの、明瞭な柱据置痕跡及び断面における柱痕跡が検出され、規模・形状を把握することができた。柱間間隔は桁行1.68m～1.74m、梁行P 1～P 9及びP 8～P 9は1.2m前後を測る。径は54cm～72cm、深さはP 10・12を除けばそれぞれ50～80cm前後を測り、7号遺構の削平を受けなければ、ほぼ均一の深さであろうと考えられる。P 10は柱据置痕跡が検出されず、柱間間隔や柱列が並ばないことや、P 5～P 9間に柱穴が存在しないことから、あるいは梁行2間の可能性も考えられる。またP 12は明瞭な柱据置痕や柱痕跡が認められるものの、組合せるべき柱穴が検出されなかった。

5号遺構（第9・10図 図版1）

7号遺構を切る溝である。東西方溝に走りさらに西側にのびるものと考えられる。調査範囲内では長さ14mまでが検出された。幅1.05m、深さ30cm前後を測る。7号遺構を切ることから比較的新しい時期の遺構と考えられる。遺物はまったく検出されなかった。

6号遺構（第9図 図版1）

遺跡東側の現道直下から出現し、7号遺構に切られる溝である。掘り込みは比較的浅く、層序も単純であるが、硬く踏み堅められた面が検出されることから、道路跡と考えられる。長さ約5m、深さは現道面より50cm前後を測る。遺物はまったく検出されなかった。

7号遺構（第9図 図版1）

調査区域全域に渡って存在し、2・3・4・6号遺構を切る道路跡である。全長およそ80m、二条の側溝が平行に走っており、覆土内には共に宝永火山灰が大量に検出されている。土層断面によれば西側側溝1回、東側溝部周辺は数度の掘りなおしが行われており側溝間の平坦面におけるソフトローム上及び東側側溝状覆土内は全面的に硬く踏み固められていることから、ここが道路としての主務を果たしていたものと思われる。東側側溝の土層断面にはV字状に一段深く掘り下げられた箇所が全面的に検出されており、当初はここが側溝の主務を果たしていたものと考えられ、また3号住居跡近辺は、数条に及ぶ硬く踏み固められた面が検出されているなど東側側溝部周辺において人々の往来が激しかったものと推察される。

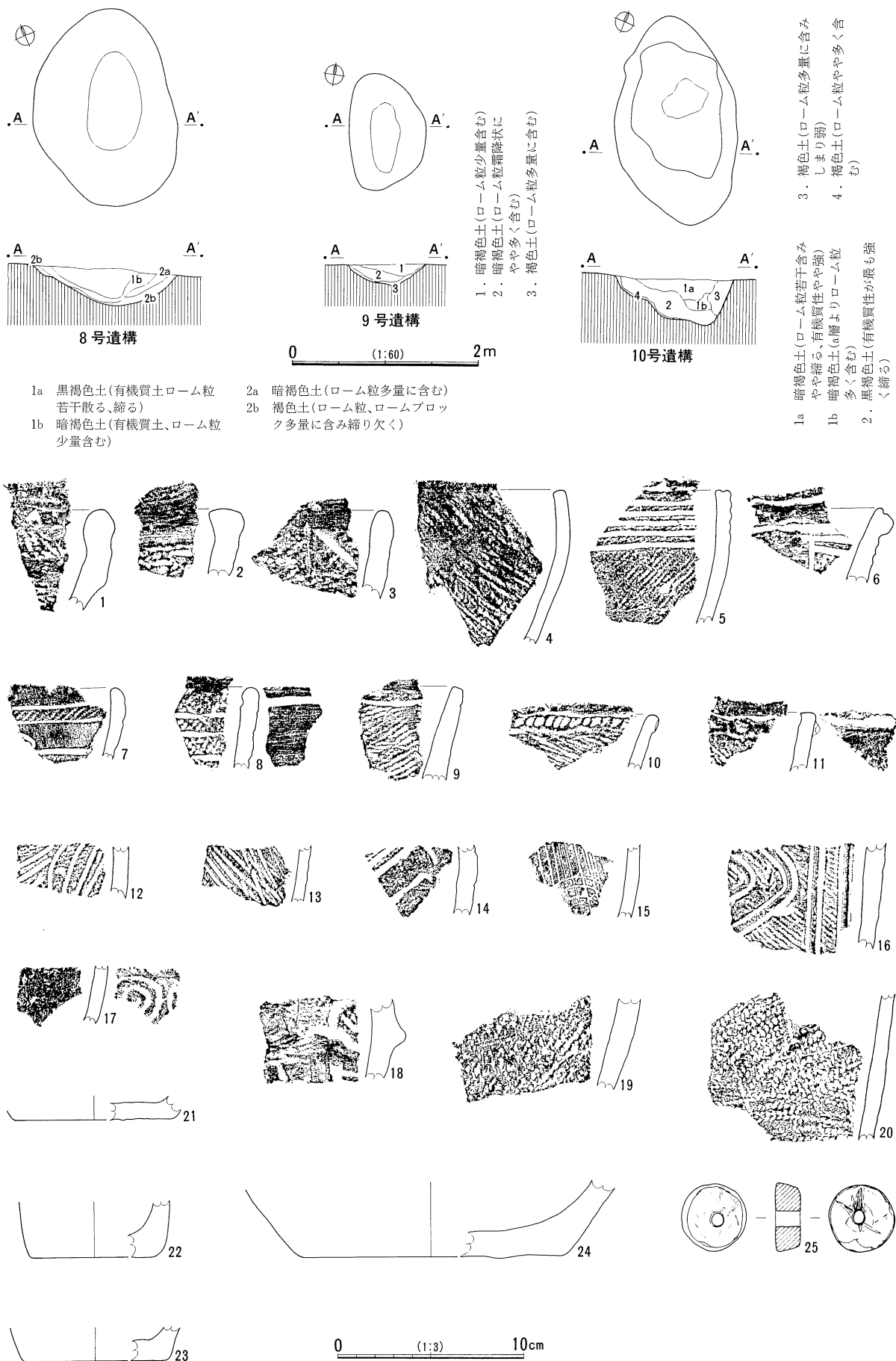
遺物は2号住居跡及び4号掘立柱建物跡付近より、それぞれ紡錘車及び2号住居跡より検出したものと接合関係を有する用途不明鉄製品の他に縄文土器片が散在的に検出したのみであり、直接本遺構に伴うものはない。

8号遺構（第10図 図版3）

確認調査時にその存在が認められた土壌である。長径2.1m短径1.5m、深さは44cmを測る。覆土は自然堆積の状況を示し、遺物はまったく検出されなかった。

9号遺構（第10図 図版3）

調査区域西南端に検出されている。長径1.26m、短径80cm、深さは30cmを測る。覆土は自然堆積の



第10図 8・9・10号遺構実測図及び遺構外出土遺物実測図

状況を示し、遺物はまったく検出されなかった。

10号遺構（第10図 図版3）

3号遺構西側に検出されている。長径2.26m、短径1.32m、深さは1mを測る。覆土は自然堆積の状況を示し、遺物はまったく検出されなかった。

遺構外出土遺物（第10図 図版5）

遺構外出土遺物を第10図にまとめた。1～24は縄文時代後期加曾利B式期に比定されるものであり、25は滑石製の紡錘車である。径3.6cm、厚さ1.4cm、中央に貫通孔があり直径8mmを呈し、重量は34.9gを量る。これらの遺物は7号遺構覆土内及び調査範囲内より散在的に検出されたものであり、直接遺構に伴うものではない。

3. ま と め

喜多地区の調査はこれまでほとんど行われておらず、今回の調査においてこの地域における生活様式の一端を垣間見ることができたことは大きな成果であったと思われる。ここでは得られた成果のうち、3号遺構を中心としてまとめておきたい。

前述した様に3号遺構カマド内より、アサリ、シオフキ、マテガイ、ハマグリを主体とする焼けた貝ブロックが灰と共に焼土中から検出されており、カマド掛け口の上下及び右袖脇床密着状況で検出された甕形土器は接合関係を有している。また当遺構は南壁付近の一部に若干の焼土ブロックを認めたものの火災住居跡ではなく、さらには3本の支柱穴は何かの拍子に動いている。また遺物はほとんど床密着の状況でカマド脇に集中しており、支脚もカマド内ではなく左袖床面上より検出されている。これらのことを総合的に考え合せると、次の様なことが想定されるのではないだろうか。

まず支脚を使用しなくとも、直接薪等の上に甕形土器を置いて煮炊きする場合もあったであろうということ。そして本遺構の場合は前述の側に属し、甕の中に貝を入れて煮炊きの最中、柱が動き甕が割れるほどの衝撃・・・すなわち地震があったであろうということ。さらに想像をたくましくすれば、住人がそれを食することなく住居自体を放棄せざるを得なかったこと。いずれにせよ、本遺構はカマド内に焼けた貝を残しながら廃絶していることは事実であり、今後の集落研究にとって新たな資料が付加えられたものと思われる。

今後この様な類例に注目していきたい。

写真図版



喜多徒士橋遺跡全景(北側より)



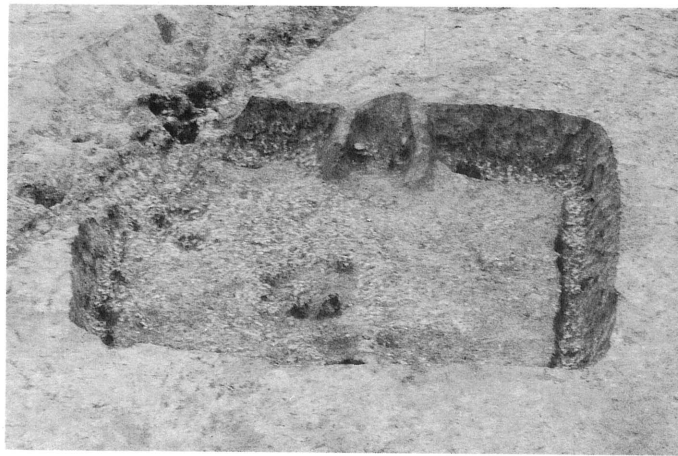
喜多徒士橋遺跡全景(南側より)



1号遺構全景



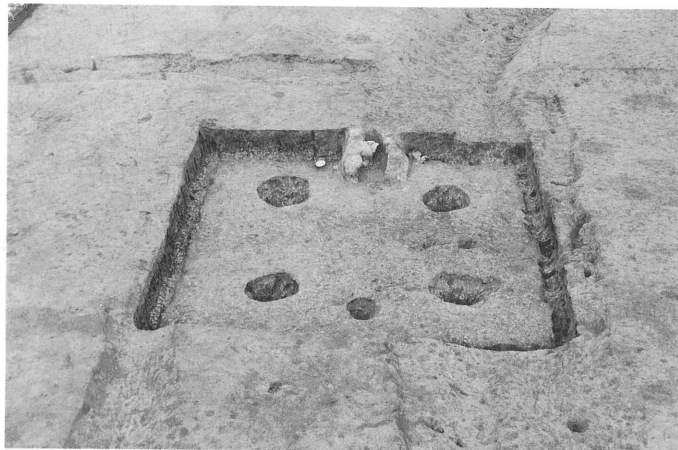
1号遺構刀子出土状況



2号遺構全景



2号遺構刀子出土状況



3号遺構全景



同カマド遺物出土状況



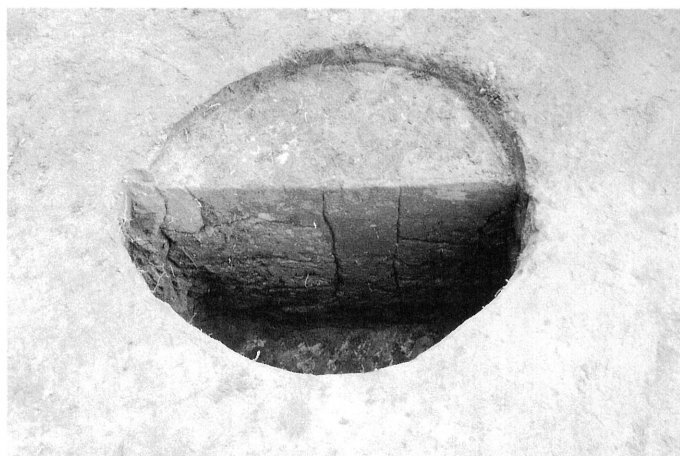
同カマド付近遺物出土状況



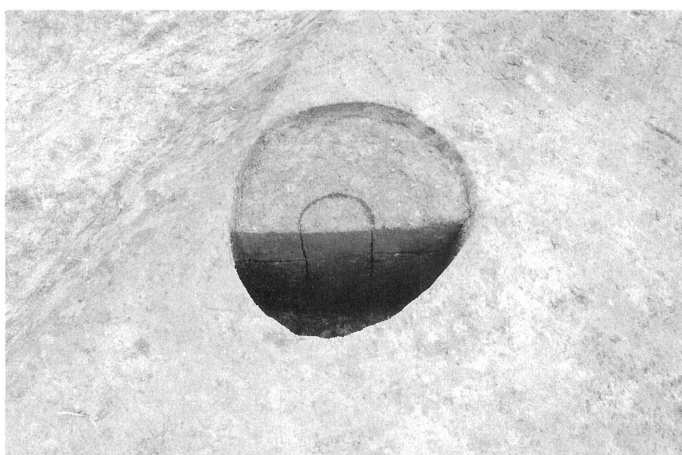
カマド内土器を除去すると貝が検出された



4号遺構全景



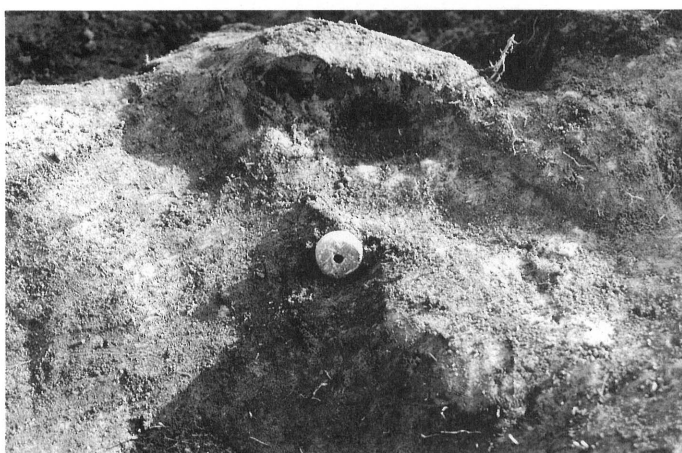
P 1 土層断面



P 3 土層断面



P 5 土層断面



7号遺構(2号遺構付近)紡錘車出土状況



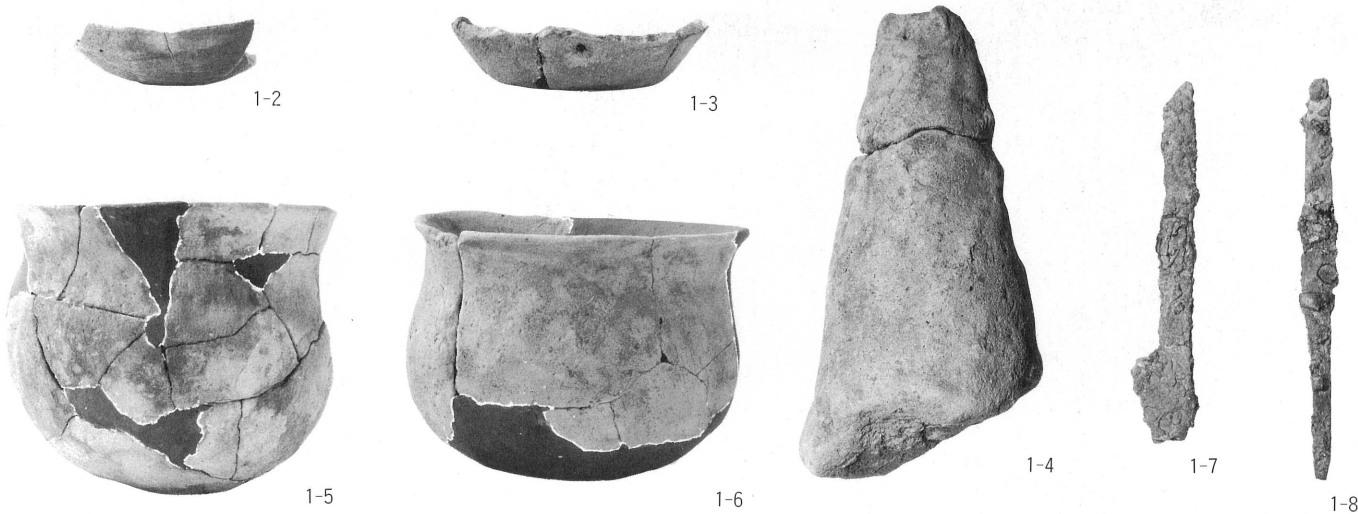
8号遺構全景



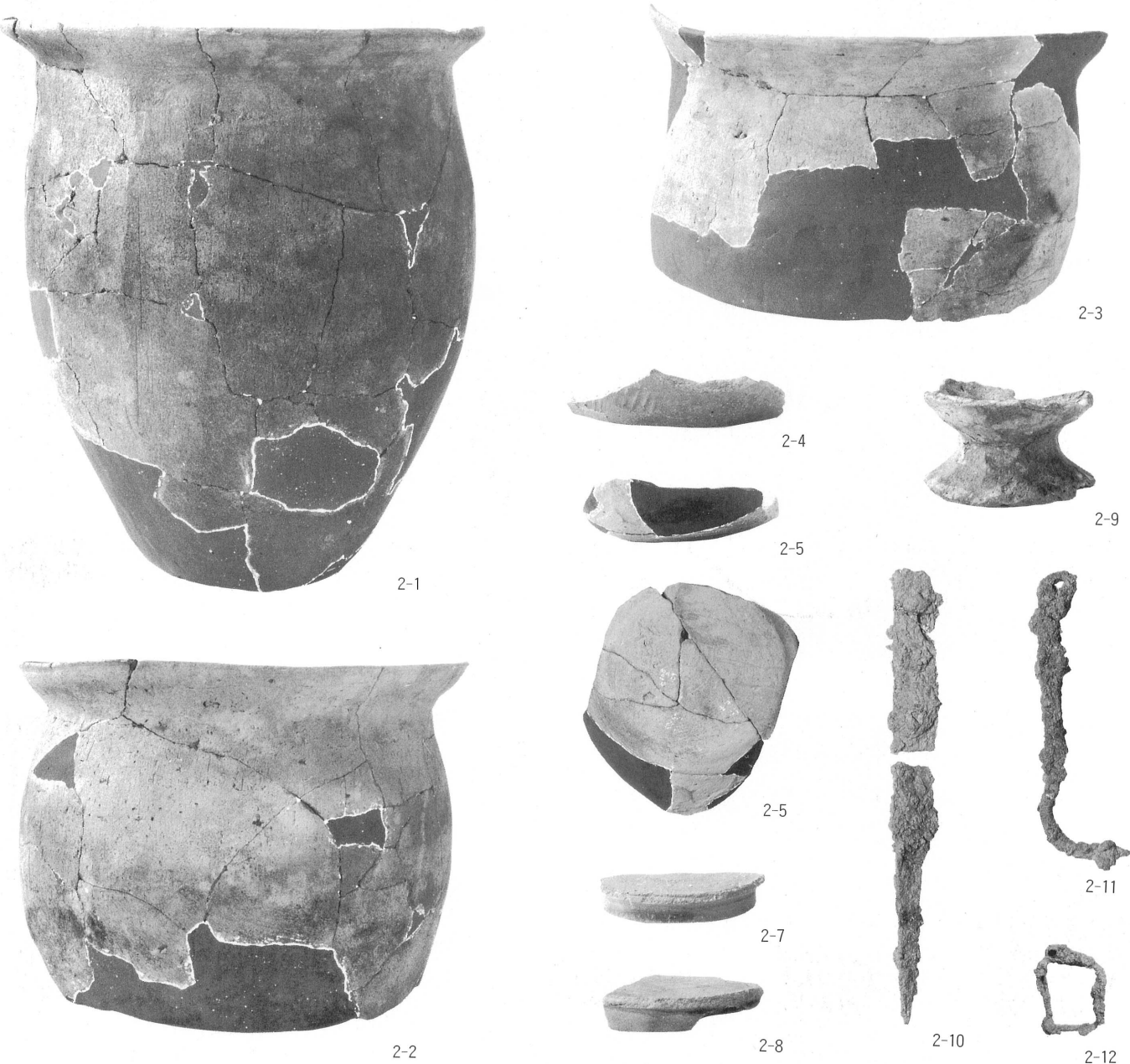
9号遺構全景



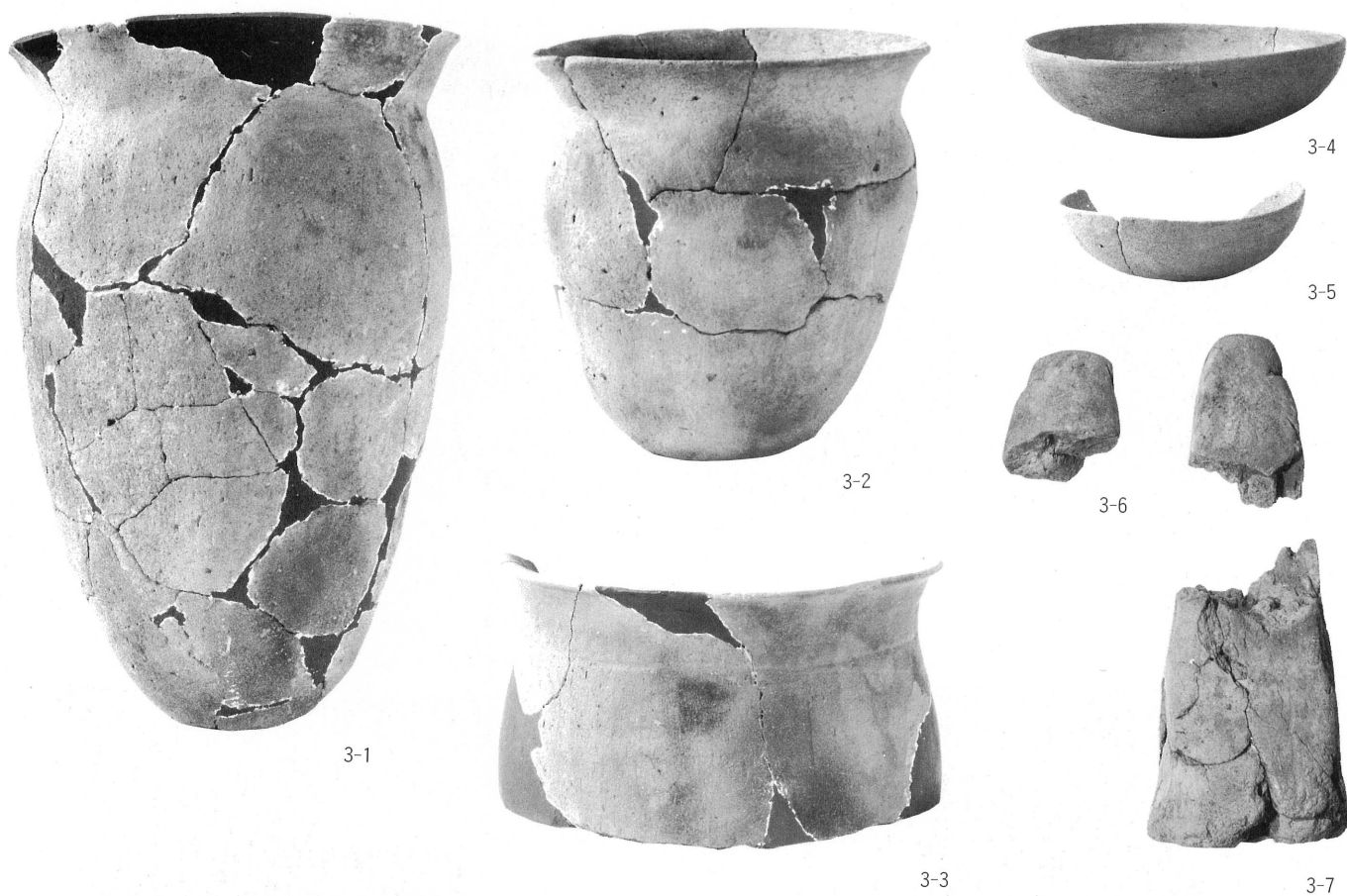
10号遺構全景



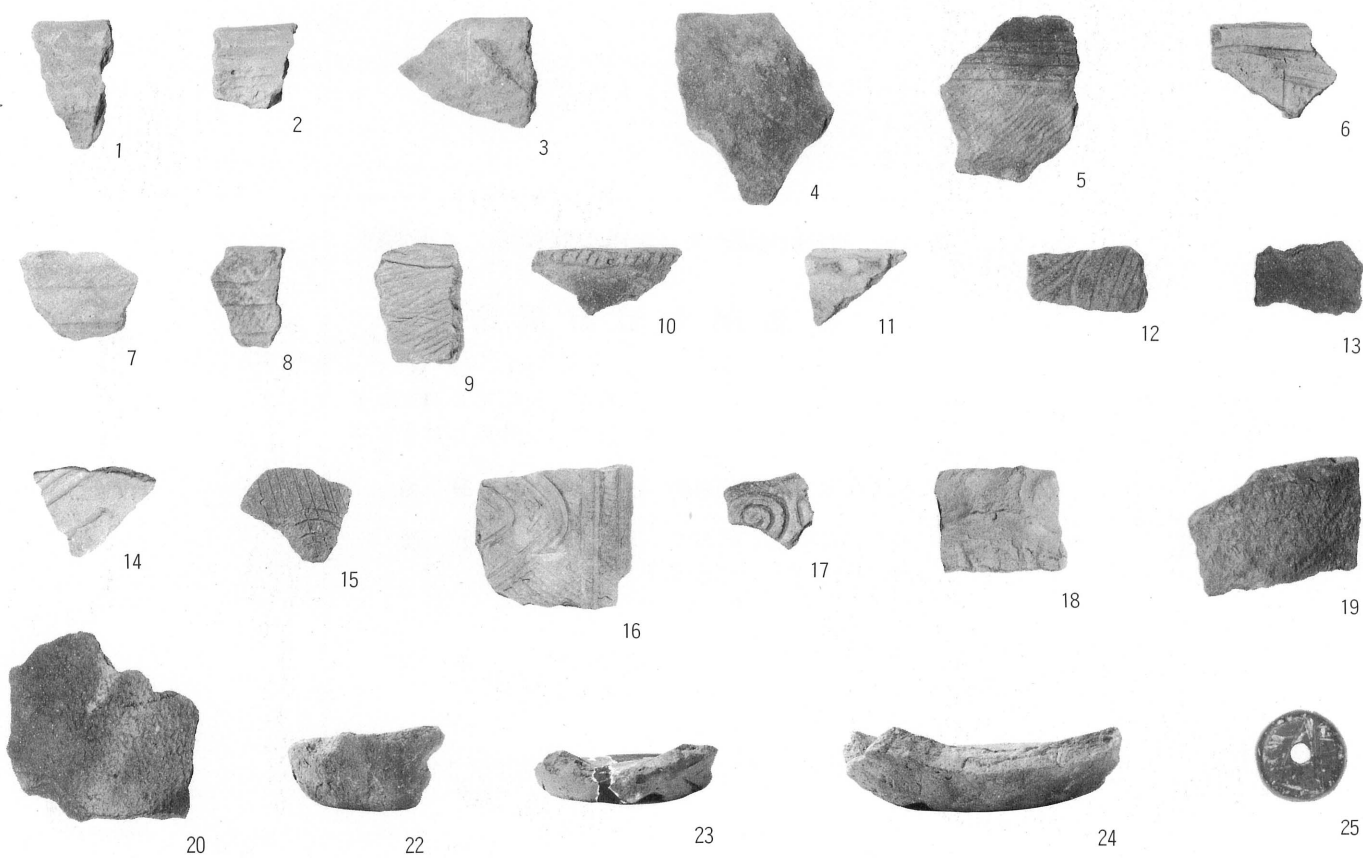
1号遺構出土遺物



2号遺構出土遺物



3号遺構出土遺物



遺構外出土遺物

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第38集

市原市徒士橋遺跡

平成²~~元~~年 3 月23日 印刷

平成²~~元~~年 3 月30日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市馬立817番地
T E L 0436 (95) 2755

印 刷 株式会社 弘 文 社
千葉県市川市市川南2-7-2
T E L 0473(24)5977